

## 応用編課題⑥

【名前：】

「話す」と「怒り」を表現する類義語の使いこなしを意識して、800文字程度の文章を書きましょう。

シチュエーション「裏切り者に怒りをぶつける」

「ふざけんじゃねえよ！」

テーブルに置いてあったショットグラスを掴み、アリアに投げつける。強いアルコールの香りが広がり、騒がしかった店内は気持ちが悪いくらいほどに静まり返った。

「キール！ 何してんの！」

「何しているかはコイツだろ！ コイツのせいで俺らは追われる羽目になったんだろが！」

殺意のみなぎった目でキールは座ったまま動かないアリアを睨む。髪から垂れるアルコールの雫がアリアの膝に落ちた。

「ちよっと待ってよ。まだアリアって決まったわけじゃ」

「これを見てもそうだって言えんのか」

キールはスマートフォンを取り出し、画面が割れるほど荒々しくタップする。キール自身もこの感情に歯止めが効かないように、物に当たるしかできることがなかった。そして写真を画面に出し、アリアに見せつける。それを見たレイの瞳が大きくなった。

写真には二人の人物が写っていた。一人は上品なドレスを着てにこやかに笑うアリア。頬は小桃色に染まっていて、幼さすらあって愛らしい。

だがアリアが笑顔を向けている人物が問題だった。

黒いスーツに身を包み、見覚えのあるオールバックの黒髪。アリアの肩に優しく添えられた手には、竜の彫刻が施された指輪が光っていた。

「コイツ……」

「忘れてねえよな、レイ。お前を重傷へと追い込んだ男だ」  
当たり前だ、とレイは強く頷いた。

この男のせいで兄を失った。この男のせいで体に一生消えない傷ができた。身体から憎しみが湧き出てくるようで、レイは強く拳を握る。アリアの顔を見ることはできなかった。

コメントの追加 [na2]: 誰のセリフか地の文で補足しましょう

コメントの追加 [na3]: 実際割れてはいないと思うので「割れそうなほど」にするのはどうでしょうか。荒々しい様子が簡潔に表現できているのは良いです。

コメントの追加 [na1]: 最初の地の文ですので主語を書きましょう。

「俺たちは別に仲間じゃねえよ。利害の一致で組んでいるだけだ」  
自分でも恐ろしいくらいキールは冷静になる。体と心がバラバラになっていく。  
「けれど、人としてのけじめくらいはつけろ。アリア」  
その眼光に濁りはない。透明で、ただ純粋な怒りがあるだけだった。

全体を通して

・ここはどこでしょうか？ 場所の描写をしましょう。  
・アリアの様子が描写されておらず、彼女がどういう心境なのかわかりません。表情などを描写するといいでしょう。



「だ、大丈夫？」

そんな少女が瞳を潤わせ、心配している。チワワのような愛くるしさを前面に出して。

大樹は少女を見やった後、ポツリと呟いた。

「香水くっさ……」

刹那、少女のラリアットが大樹の首に炸裂した。

「あんだとテメエー……！」

「うぐおう!？」

又しても痛みで意識が遠のきかける。少女とは思えない怪力に翻弄される中、大樹は自嘲気味に笑った。

「どうやら自分には女運がないらしい、と。」

## 応用編課題⑧

【名前】

講義「街中」と「口論」の内容を活かして、1200文字程度の文章を書きましょう。  
シチュエーション「街中で突如始まった口論に巻き込まれる主人公」

車のクラクション、シンガールの曲が流れるビルのディスプレイ、ゴミを漁る鳥の鳴き声。ただその場にいただけでも、この街がどれほどの音に囲まれているのかが分かる。

木下は広場のベンチに腰をかけ、ぼーっと空を見上げていた。欲しいのは景色ではなく、あくまで目的が音だからだ。

けれどこの透き通るような青空を見ていると、なんだかどうでもいいような気もしてきた。

「汚い音……」

実際、綺麗な物というのは探せばいくらでもある。洋服、宝石、アンティークに建物。それらは実物として存在する綺麗な物だからだ。

けれど音は違う。感じ方や聞こえ方にまで差は生じ、残る物ではない。全く同じ音はこの世に存在しないと、それは作曲家を目指す誰もが知っていることだ。

「今日もスランプか」

すっかりスランプに慣れてしまった木下は、首にかけていた黒いヘッドフォンに手をつける。そしていつものように爆音でロックでも聞こうと思った時だった。

「なめんじゃないわよ！」

風船が割れたのか、そんな乾いた音がした。聞こえてくる女の金切り声。思わず木下はヘッドフォンから手を離した。

驚いたのは木下だけでなく、広場にいた人々も同じように目を丸くする。声は後ろから聞こえてきて、木下は目線だけを後ろに向けた。

「バカなの？ 二股どころか六股かけていただなんて！ 信じられない！ サイテ

ー！」  
見えたのはカップルらしき二人組だ。一人の女は派手な化粧をしていて、叫ぶ声もインクが切れたペンのような不愉快なものだ。木下は静かに眉をひそめた。

コメントの追加 [na2]: なにをもってしてスランプと判断したのでしょうか。汚い音しか聞こえてこないからでしょうか。場所柄仕方がないようにも思えるので、木下の基準が知りたいです。

コメントの追加 [na1]: 「青空」の1ワードでおおよその時間帯が提示できているのが良いです。

コメントの追加 [na3]: 恐らく平手打ちかと思うのですが、その後説明がないのでわかりません。木下の憶測でもいいので入れましょう。

コメントの追加 [na4]: この女性からは(恐らく)平手打ち、金切り声、鳴き声の「音」が発せられています。この音に対して木下はどう思ったのでしょうか？ スランプであるなら、ここでスランプが打ち破られそうな「音」の出会いを模索してもいいでしょう。

もう一人はよれつとしたシャツを着た男でヘラヘラと笑っている。話からして男の方が失礼を働いたようだが、反省の色は全く見えない。していることといえば、無精ひげをさすっていることぐらいだ。

やれやれ、と木下は首を振る。関わるのすら面倒くさそうで、再びヘッドフォンを手を取ろうとした。

「なに見てんのよ！ そこ！ そこの黒いアンタ！」

げ、と口から漏れたと思った。まさかの女は近くにいた木下に目をつけたのだ。それも随分と的確に。

「どうせアンタも笑ってんでしょ！ 騙されるほうが悪いって！ ふざけんな！」

もう女はぐしゃぐしゃに泣いていて、化粧も黒い涙が出るほどにまで歪んでいる。

怒りを他者に向ける姿勢には関心しないが、ここで神経を逆撫でするのも面倒くさい。木下は話を合わせることにした。

「いえ、思っていないです」

「嘘！ 思っているくせに！ 何でアタシばかりなのよ！ いったって！ いったって！」

「思っていないですよ。本当に」

「うわああああん！」

崩れ落ちる女を木下は同情の目で見つめ、本心ではチツと舌を鳴らした。

(面倒くせえな。コイツ)

どうして、というならこっちのセリフだ。なぜ貴重な休みをお前の愚痴の為に使わなければならないのだ、と。

コメントの追加 [na1]: 彼は神奈とどういう関係でしょうか？ 早いうちに説明を入れましょう。

コメントの追加 [na2]: 不快感がすぐに理解できる良い比喩表現です。

## 応用編課題⑨

【名前：】

講義「寝起き」と「病気・怪我」の内容を活かして、1200文字程度の文章を書きましよう。  
シチュエーション「朝起きたら風邪をひいていると気づく主人公」

「神奈ー。起きろー」

カーテンが開かれ、朝日が部屋いっぱいに入りこむ。白いベッドがより一層白く見えた。

ぼんやりとする視界で朝日が入り、思わず神奈はぎゅつと目をつむる。そしてまた頭から布団を被り直した。

「ころころ」

圭太はやれやれと神奈がいる布団を剥がそうとする。けれど布団はピクリとも動かなかった。

「仕事、遅れるぞ」

無反応。

「朝飯は神奈が好きなホットサンド」

ぴく、と少しだけ布団が動く。けれど神奈自身が出てくることはなかった。

「神奈？」

圭太は神奈の頭がある位置まで顔をよらせる。すると少しだけだが、神奈の小さな額が見えた。

「どうした？」

圭太に問われ、神奈はもごもごと口を開けた。

「……あ」

「あ？」

「あたま、いたい」

喋るだけでも痛みが走り、神奈は眉をひそめた。喉もタワシでも突っ込まれているかのような、イガイガとした感覚がある。

朝日を浴びた時に違和感があった。やけに眩しすぎるような気がしたのだ。体もいくらか鉛のように怠い。

コメントの追加 [na3]: 「仕事」とあることから成人していると推測します。一度も発熱したことがないのは少々不自然な気がしました。本当にそうなら「超健康優良児」などの補足説明を入れたいです。

「頭が痛いのか? どれ」

すると圭太は特に焦ることなく、神奈の額を触る。そのままじっとしてから手を離し、うんと頷いた。

「熱がありそうだな」

「……熱?」

「神奈は熱になったことないのか?」

「……わかんない」

「ちよつと待ってくれ」

圭太は神奈を残して部屋を出る。そして戻ってきたとき、手には体温計が握られていた。

「使い方は分かるか」

「……うん」

神奈は手を出して体温計を受けとる。脇に挟むとヒヤッとした感触があったが、冷たくて気持ちよかった。

ピピッと音が聞こえ、体温計を圭太に渡す。圭太は「ありや」と子どものような声を出した。

「三十八度六分。だいぶあるな」

「どうりで、怠いと思つた……」

「こりゃあ仕事は無理だよ。今日は休め。会社にはオレから言っておくから」

ほんぽんと頭を撫でる圭太の手つきは子どもに対するそれそのもので、神奈もまたそれを素直に受け入れる。若干、心地がいいと思つたのは秘密に。

「とにかく寝ることだな。そうすればいくらか楽にもなるから」

「うん……」

「食欲はあるか?」

「あまりない……けど、冷たいものが食べたい」

「分かつた。ゼリーかなんか買ってこよう」

圭太はさつさと寝巻きから普段着に着替え、サイフをポケットに突っ込む。それを神奈は布団越しから見ている。

いつもは頼りない背中が、なんだかとても頼もしく見える。これも熱のせいなのではないだろうか。

「あの」

「ん?」

「……ありがと」

可愛げのない掠れた声で礼を言う。圭太はニツと笑つた。

「気にすんなって」  
ベッドの近くにスポーツドリンクを残し、圭太は部屋を後にした。  
暫く出ていった圭太を見送っていた神奈だが、体力が底をつき、終いには泥のよう  
にぐっすりと眠った。

- コメントの追加 [na4]: 本来数字は漢数字を使用するのが原則ですが、カウントダウンの場合はアラビア数字の方が合うでしょう。
- コメントの追加 [na6]: なにを指しているのかわかりにくい。「上からの命令」など書くのがよいでしょう。
- コメントの追加 [na1]: なにを指しているのかややわかりにくい。「無機質」を表現する別の言葉を入れましょう。例: 冷やかかさ
- コメントの追加 [na7]: 現在進行形なので「いる」にしましょう。
- コメントの追加 [na2]: 残したということでしょうか？
- コメントの追加 [na3]: 壁にどのようにして隠れるのでしょうか？ 電柱の陰など、物陰に隠れるのが適切かと思います。
- コメントの追加 [na5]: 増井がなぜ狙われているのか、アキにまで情報は降りてこないと思いますが、彼女が知っている範囲の増井の情報を入れたいです。読者に彼がどんな人間か理解してもらうためです。

応用編課題⑩

【名前…】

これまでの文章・描写についての講義を意識しつつ、2000文字程度の文章を書きましよう。  
 シチュエーション 「人混みでターゲットを追う↓人気のないところで言葉を交わす↓バトル(冒頭だけでも)」

『ターゲット、北西へ移動中。暫く泳がせろ』  
 人間とは思えない無機質な声がイヤホンに流れる。ガラス張りのビルしか見えないオフィス街がそれをより一層強調させた。  
 「了解。接触のタイミングは？」  
 『こちらで指示を出す。ナンバー9は狙撃ポイントへ移動した』  
 「ラジャー」  
 プツ、と無線が切れる。アキは飲んでいたコーヒをそのままに、カフェから出た。時刻は昼時を迎え、ビルからはスーツ姿のサラリーマンたちや、財布片手に雑談をするOLたちが出てきた。ランチにするには絶好の快晴だから、そうするのも頷ける。けれどアキのポケットには財布ではなく、小さなナイフが入っていた。頸動脈を斬るには充分すぎるくらいのものだ。  
 T字路の手前までくると、アキは右側の壁に隠れるようにして潜む。そして心の中でカウントをとる。  
 (三、二、一……)  
 カウントが終わった途端、右側の道から人影が現れる。それがターゲットの増井であると分かると、アキはよしと頷き、気づかれないようにその後を追った。  
 ここまでは全て上の指示だ。合流場所も、増井が通るルートも上が調べてくれたもの。アキはそれをこなす駒でしかない。  
 けれど親に捨てられ、居場所を無くした自分にとってはたった一つの居場所だ。どんな汚れ仕事でも、嫌な顔ひとつせず自分がいた場所。  
 けれど時折、それが虚しく感じることもある。それが何なのか分からない。  
 (いけない、いけない)  
 危うく集中が途切れるところだった。アキは真正面に視線を戻す。変わらず増井はアキの前を歩いていった。

コメントの追加 [na9]: 高校生と限定する必要もないので取っていいでしょう。

コメントの追加 [na8]: 増井の異常さが垣間見える良い表現です。

(このまま作戦通りなら、真っ直ぐ行くはず)  
その先で増井はナンバー9に撃たれて死ぬ。その手はずだ。無反応なイヤホンがそれを教えていた。

すると前から学生だろうか、スポーツウエアを着た集団が走ってきた。エイ、オー、エイ、オーと掛け声が迫る。

アキは特に気にすることなく、前に行く増田に視線を置いていた。

だからこそ油断したのだ。突拍子な行動に出る筈もない、と。

学生たちが横を通り過ぎていく直前、増田がこちらを向いた。

「まだまだだね」

「！」

咄嗟のことに頭が追いつかない。追跡されている側のターゲットが、こちらを向いた。それも余裕のある笑みを浮かべて。

すると増田はふっと道から外れ、学生たちの集団に横から入った。そして、奥にある路地裏へと姿を消した。

「なっ……！！」

軽やかな身のこなしに一切の無駄がない。そして何より学生たちは何故か増田の存在に気づいていなかった。そのままランニングを続けて去っていく。

「待て！」

誰もいない路地裏へとアキは入る。走りながら無線機に向かって叫んだ。

「トラブル発生！ ターゲットに気づかれた！」

『何だ?!』

「原因は不明！ これより後を追う！」

無線機からは退避命令が出されるが、それに従う気にはなれない。仮にこれがアキの起こしたことなら、それなりの責任を取らなければ腹の虫が収まらないというものだ。

湿ったカビだらけの路地裏を右へ、左へと走る。痕跡などない。だから見つかるのかさえ問題だったが、その心配はなかった。

増田はいくつか曲がり角を過ぎた行き止まりで待機していた。アキが追い付くと嬉しそうに笑い、大げさに手を振った。

「やあ、早かったね。もう少し迷うんじゃないかと思ってた」

久しぶりに会う高校の同級生のような感覚で増田は話しかけてくる。アキはそれには答えず、代わりに鋭い目つきで返した。

「おお、こわ。女の子はいつだって強いなあ」

「何のつもりだ」

増田はふふんと鼻を鳴らしただけで、アキの問いには答えない。答えるつもりもなさそうだ。

「ここじゃ何だし、どうだい？ お茶でも。クリームタルトが美味しい店を知っているし」

その返答よりも先に、アキの体が動く。腰を低くし、増田の懐へと入った。

瞬時に両手を出し、左手で増田の服を掴む。ただのTシャツだったお陰で掴みやすい。そして、アキは持っていたナイフを右手に持つ。後はこれを体に突き刺せば――。

「おっと。それはダメだな」

だがナイフは増田のわき腹に入る直前で止まる。増田が左の手でがっちりとおアキの右腕を掴んだからだ。

「ぐっ」

「動かないで。折るよ」

人間とは思えない怪力で増田はアキの腕をねじろうとする。筋が音を立てたような気がして、大人しくアキは項垂れるしかなかった。

「活発すぎるのも難題だね。君、モテないだろ？」

「それは私に関係することじゃない」

両者一步も譲らず、そのままの体勢で話を続ける。声のトーンも荒ぶることなく、淡々と進んでいく会話。些か妙ではあるが、二人の空間ではそれが普通のようにも見える。

「女の子がそんな口調しないでよ」

「貴様がその減らず口を閉じれば考えてやらんでもないがな」

瞳孔を目一杯に開き、アキは悪態をついた。